

プロジェクト研究2 言語活動の充実Ⅰ

学びを楽しみ学びをつなぐ国語の授業づくり

大和高田市立磐園小学校教諭 的 場 愛 子

Matoba Aiko

指導主事 徳 富 智香子

Tokutomi Chikako

葛城市立磐城小学校教諭 川 村 加耶菜

Kawamura Kayana

要 旨

小学校国語科の学習において、伝統的な言語文化に関する素材研究と児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫を柱とした授業研究を行った。児童が古典を学ぶ楽しさを感じながら、より主体的・協働的に言語活動に取り組むことで国語の学びに対する興味・関心や学習意欲が高まることが分かった。

キーワード： 伝統的な言語文化、素材研究、学びに対する興味・関心、学習意欲、主体的な思考・判断が生かされる言語活動

1 はじめに

(1) 小学校国語科の学びに関する現状と課題

小学校における国語科の学びを考えるに当たり、全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査(小学校第6学年児童対象)を基に課題を探った。平成25、26、27年度の調査結果の内、「国語の勉強は好きですか」「国語の勉強は大切だと思いますか」の項目に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童の割合をグラフに示した(図1)。過去3年間のデータを比較すると、「国語の勉強は好きですか」の項目に肯定的な回答をした割合は増加しているが、「国語の勉強は大切だと思いますか」の項目に肯定的な回答をした割合がどれも90%以上であるのに対し、前者は60%前後となっている。また、平成27年度の調査結果において、「算数の勉強は好きですか」「理科の勉強は好きですか」の項目と国語の同項目を比べると、国語科の「学習が好き」と回答した児童の割合が低いことが分かった(図2)。これらの結果から

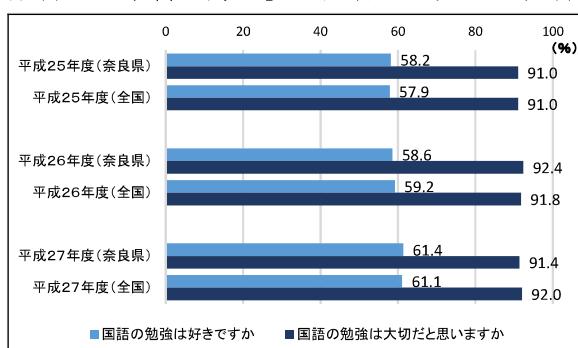


図1 全国学力・学習状況調査(H25～H27)
国語に関する項目の経年比較

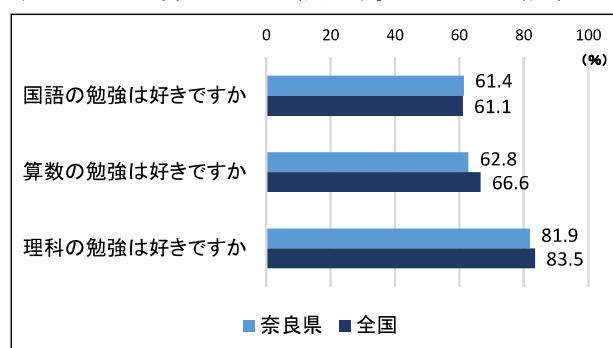


図2 全国学力・学習状況調査 (H27)
教科間の比較

国語の勉強が好きと感じる児童を増やすために、教員は児童が国語を好きになるような授業を開拓することが大事であり、これは、国語科の指導改善を考える上でも重要な視点であると言える。

先述した「国語の勉強は好きですか」の質問項目は、「全国学力・学習状況調査結果チャート」では、「学習に対する関心・意欲・態度」の領域に位置付けられている。そこで、本研究では「国語の勉強が好きであること」を「国語への興味・関心や学習意欲」の要素と捉え、興味・関心や学習意欲を高めることを研究課題とした。課題解決の方法としては、国語科の授業づくりにおいて「伝統的な言語文化に関する教材の素材研究」と「児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫」という二つの新しい試みを考えた。

伝統的な言語文化に関する指導の重視は、現行の学習指導要領において国語科改訂の要点の一つに挙げられている。具体的には、小学校低学年で昔話や神話・伝承、中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文などを教材として取り上げることとなった。松木（2014）は、現行の学習指導要領の定着を認めつつも、未だに小学校における古典指導が現場の教員にとって課題とされている傾向を指摘している。また、白石（2011）は、小学校における古典指導について、音読や暗唱を重視するという活動だけで伝統的言語文化に触れ、その文化を継承し、さらに「新しい文化の創造」を目指せるのかと問うている。小学校においては、古典学習の入門として音読を中心に学習が展開されるが、古典教材を小学校でどのように展開していくべきか、多くの教員が悩むところである。従って、試みの一つとして、「伝統的な言語文化に関する教材の素材研究」を進め、児童が古典を楽しいと感じられる授業を開拓したい。

また、国語科の学習では、言語活動を通して指導事項を指導するが、その言語活動は、児童が主体的に取り組める魅力的な活動であることにより充実される。国語科の授業づくりでは、まず児童に付けさせたい力を明確にし、そのために最適な言語活動を選択した上で、児童自身にとっての課題解決の過程となるように言語活動を位置付けていくことが重要である。さらに、学習過程を工夫する際に、児童の主体的な思考・判断が生かされるように言語活動を設定することで、児童の有能感や知的好奇心が高まることが期待できる。このように、「児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫」をもう一つの試みとして、授業づくりを進めていきたい。

そこで、この二つの試みを通して、児童の国語科の学習に対する興味・関心や学習意欲を高める方法について研究し、国語が好きな児童を増やすことにつなげていきたいと考えた。

（2）研究目的

全国学力・学習状況調査のデータから、国語に対する興味・関心や学習意欲の向上が課題として浮き彫りになった。そこで、「伝統的な言語文化に関する教材の素材研究を進めること」と「児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動を工夫すること」を柱とした授業を実践し、児童の国語に対する興味・関心や学習意欲の高まりについて検証することを研究目的とした。

（3）研究仮説

伝統的な言語文化に関する教材の素材研究を進め、児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動を工夫することは、国語科の学習に対する興味・関心や学習意欲を高める効果がある。

（4）研究方法

ア 研究期間 平成27年5月～12月

イ 研究対象 大和高田市立磐園小学校 第3学年 児童32名
葛城市立磐城小学校 第5学年 児童31名

ウ 研究内容

○伝統的な言語文化に関する教材の素材研究を基にした授業実践及び考察

○児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動を工夫した授業実践及び考察

○児童の国語に対する学習意欲の変容を見取るための質問紙調査の実施と分析

なお、本研究は、県内の小学校2校が協力するプロジェクト研究とし、学びの縦のつながり（系統）と横のつながり（交流）を意識しながら研究を進めた。

2 研究の重点

(1) 実践前の対象児童の実態

ア 大和高田市立磐園小学校の児童の実態

大和高田市立磐園小学校は、創立140年の歴史ある学校で、全校児童487名の中規模校である。「学ぶことの楽しさを味わわせる授業づくり」を主題として、国語科における「話すこと・聞くこと」を中心に過去3年間継続して研究を進めている。

研究対象学級の児童（3年生）は、対象校が「話すこと・聞くこと」を中心に研究を進めていることから、授業中では積極的に挙手して自分の考えを発表する姿が見られた。しかし、グループでの学習の際には、自分が伝えたいことを優先してしまい、友達の意見を上手に聞くことができない場面もあった。

伝統的な言語文化に関する学習では、第2学年時に「十二支のはじまり」、第3学年時の5月には、昔話「たのきゅう」を教材として取り組んだ。昔話等、教員の読み聞かせをどの児童も楽しみにしており、集中して話を聞く姿が見られた。また、校内で実施している給食川柳を作る活動を通して五・七・五のリズムを理解している児童は多いが、国語の授業では俳句について学習していない。季語の意味や文語調の言葉については、読書等を通して理解している児童はいる。

児童の国語に関する学習意欲の変容や学習課題を見取るため、28項目からなる質問紙調査を5月に実施した（資料1参照）。質問紙調査の項目は、栃木県総合教育センターが実施した「学ぶ意欲をはぐくむー『学習に関するアンケート』を活用してー」の質問項目や全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙の質問項目から選択し、さらに、国語や古典の学びに関する質問項目を追加して作成した。この質問項目は、「4：とてもそう思う」「3：どちらかといえば、そう思う」「2：どちらかといえば、そう思わない」「1：まったく思わない」の4件法で回答を求め、それぞれ4点、3点、2点、1点として点数化し、各質問項目ごとに平均値を求めた。

まず、国語や古典の学びに関する質問項目に着目すると、図3のようになる。グラフより、古典に関する質問項目が国語に関する同じ質問項目より平均値が高かった。古典の学習経験が少な

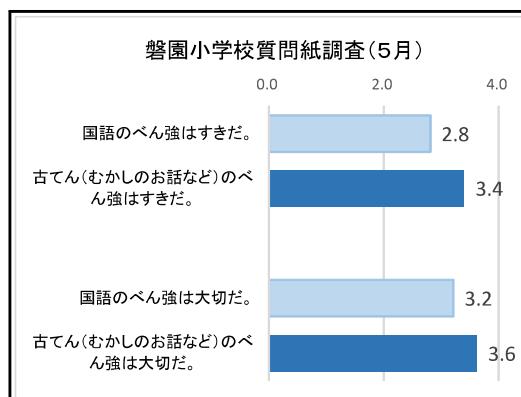


図3 国語・古典に関する質問項目

表1 平均値の低い質問項目

質問項目	回答番号				平均値
	4	3	2	1	
音読することはすきだ。	7	8	7	10	2.38
自分の考えを文章に書くことはとく意だ。	11	5	5	11	2.50
べん強面では、友だちからたよられていくと思う。	10	7	8	7	2.63
友だちの前で自分の考えや意見を発表することはとく意だ。	10	9	4	9	2.63
国語のじゅぎょうのさい後に、学習内ようをふり返る活動をよく行っていると思う。	11	9	7	5	2.81
国語のじゅぎょうでは、自分の考えを発表するき会があたえられていると思う。	14	6	4	8	2.81

(N=32名)

い3年生の児童にとって、古典の学びに対する期待感が高いことが推察された。次に、28の質問項目の内、平均値が低い項目を整理したものが表1である。質問項目の内容から、音読や自分の考えを書いたり発表したりする学習活動を充実させることや、児童が有能感や自信をもつことができるような協働的な学習を進める必要があることが示唆された。

イ 葛城市立磐城小学校の児童の実態

葛城市立磐城小学校は、全校児童675名の中規模校である。「伝え合い、認め合い、学び合う子どもの育成—楽しく分かる授業をめざしてー」を主題として研究を進めている。学校全体で読書活動に力を入れており、高学年の児童が低学年の児童に対して本の読み聞かせに行く活動や、「お話をうそくの会」という地域の方々がボランティアで読み聞かせに協力している。

研究対象学級の児童（5年生）は、5月の第1回調査から授業に集中して取り組む姿が見られた。また、どの教科においてもペア学習やグループ学習を取り入れ、ホワイトボードを使って意見を交流させる等、友達同士で学び合うことに意欲的にも取り組むことができていた。しかし、グループの話合いの場面では、一人一人の意見を十分生かすことができず、特定の児童だけで課題を解決してしまう場面もあった。

伝統的な言語文化に関する学習については、第3・4学年で易しい文語調の短歌や俳句について学習しているが、継続的に深く学ぶところまでは至っていない。また、教科書教材以外の古典教材を進んで学ぶ機会も少なかった。

磐園小学校（3年生）と同様に、児童の国語に関する学習意欲の変容や学習課題を見取るため、28項目からなる質問紙調査を5月に実施した（資料2参照）。国語や古典に関する項目に着目したグラフが図4である。平均値を比べると「古典の勉強は好きだ。」の項目が国語の同項目より高いことから、古典の学びに対する興味はあることが分かった。しかし、「古典の勉強は大切だ。」の項目が国語の同項目よりも低いことから、古典を学習する必要性や意義をあまり感じていないことが推察された。次に、平均値の低い質問項目を表2に整理した。磐園小学校と同様に、音読や自分の考えを書いたり発表したりする活動を充実させることや、児童の有能感を高める取組が必要であることが分かった。また、「むずかしい問題に出会うとよりやる気が出る。」という項目が低いことから、深く思考して粘り強く考えることができる課題設定の必要性も確認された。

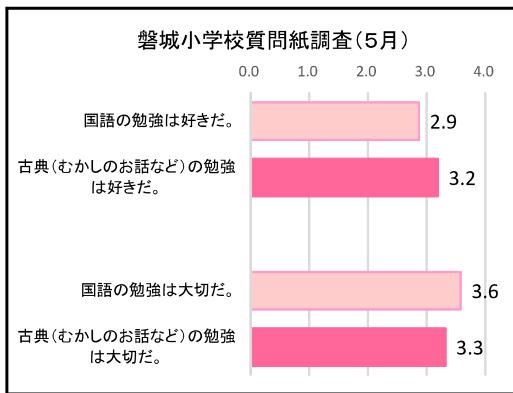


図4 国語・古典に関する項目

表2 平均値の低い質問項目

質問項目	回答番号				平均値
	4	3	2	1	
勉強面では、友達からたよられてい ると思う。	2	11	13	5	2.32
友達の前で自分の考えや意見を発 表することは得意だ。	4	12	8	7	2.41
音読することは好きだ。	2	17	7	5	2.52
むずかしい問題に出会うとよりやる気 が出る。	9	5	11	6	2.55
自分の考えを文章に書くことは得意 だ。	3	15	9	4	2.55

(N=31名)

このように、両研究校とも、事前の質問紙調査の結果や研究員の観察等により、児童の実態が明らかになった。それらを基に、授業づくりの視点を明確にしながら研究を進めていった。

(2) 学びを拓く教材開発

研究を進めるに当たり、児童の国語に関する学習意欲を高める手立てとして、「学びを拓く」

ことを一つの柱と考えた。ここで言う「学びを拓く」とは、学習の指導方法の研究だけではなく、教材の素材研究も進めることを意味している。小学校の国語科における授業研究においては、単元構成や発問、板書計画、ワークシート等の指導法に重きが置かれている傾向がある。指導研究だけでなく、取り扱う教材の素材研究を進めることで、児童の国語科の学びに対する興味が広がると考えられる（図5）。今回の研究では、先述したように小学校で課題となっている伝統的な言語文化に関する内容に焦点を当て、その教材の素材を研究する。古典学習の入門期に行う学びを豊かにすることが、国語科の学習意欲を高める一つの手立てとなると考えた。

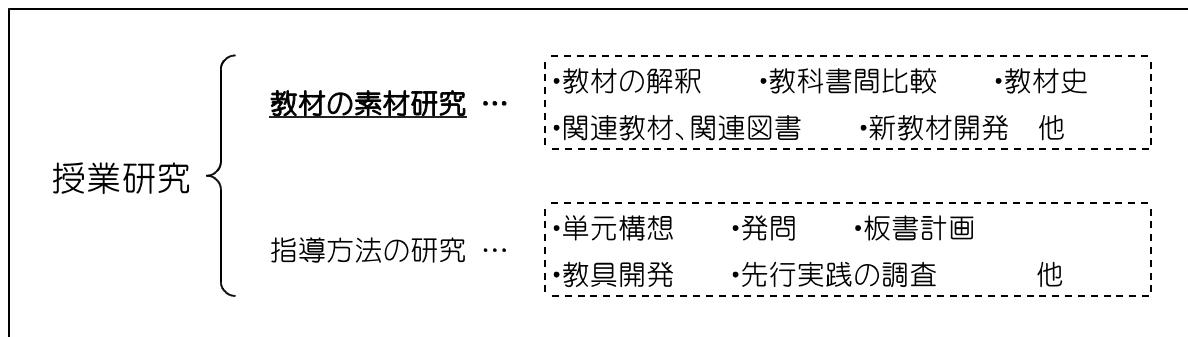


図5 授業研究の内容

(3) 児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫

児童の国語に関する学習意欲を高めるもう一つの手立てとして、「児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫」を挙げる。国語科における言語活動の充実とは、単に言語活動の量を増やすということではなく、児童が言語活動にどれだけ主体的に関わっているかといった活動の質が問われることとなる。つまり、国語科の言語活動の充実には、児童が主体的に言語活動に取り組むことが重要となる。そのために、①児童の学習過程が課題解決の過程となるように単元を構成する、②課題の解決に向けて児童自らが考えたり判断したりする場面を設定する、③児童が意欲的に取り組める魅力的な言語活動を学習のゴールに位置付ける、④児童が自覚的に学習の見通しと振り返りを行う、⑤他の児童等と協働的に関わりながら課題を解決する等が、授業づくりのポイントとなる（図6）。

国語科においては、言語活動を通して指導事項を指導することが基本となる。単元のゴールに設定する言語活動が児童にとって魅力的なものであり、付けたい力に最適な言語活動であることは不可欠である。その言語活動は、児童自らが進んで取り組みたいと思う活動であり、課題を解決するために深く思考したり、言葉を手がかりに判断をしたりすることが重要となる。児童が課題解決において、自らの思考・判断を十分に生かすことができたと感じるためには、教員が児童の思考・判断を生かすことができる言語活動を設定しなければならない。従って、今回の研究では、児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫をもう一つの柱とした。

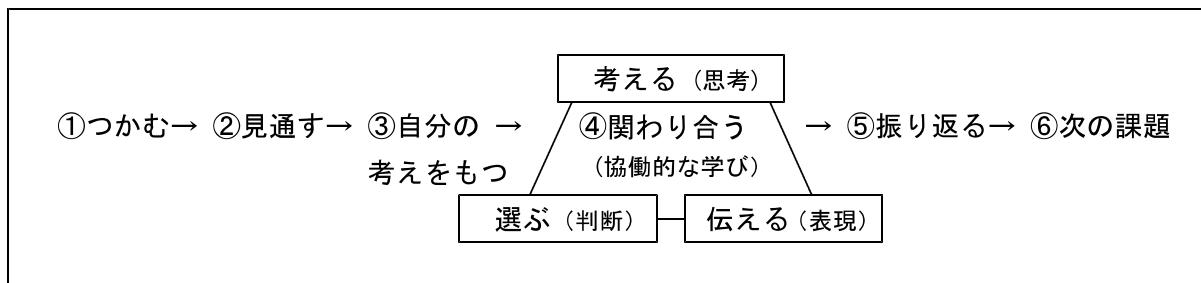


図6 言語活動の充実を目指した学習過程

(4) プロジェクト研究の意義

今回の研究は、小学校2校において実施するプロジェクト研究である。そこで、プロジェクトとして研究に取り組む意義を、「学びをつなぐ」という次の二つの視点でまとめた。

まず一つは、学びの「縦のつながり」である。学年間の系統を意識して学習を進めることは、当該学年で培うべき力を明確にするとともに、身に付けた力を次の学年の学びに生かす上で重要と言える。今回の研究では、3年生と5年生という異なる学年の児童を対象としており、授業づくりにおいて、中学年から高学年への学びの系統を意識した研究を進めていった。

二つ目は、学びの「横のつながり」である。事前の質問紙調査等の分析によると、磐園小学校（3年生）の児童と磐城小学校（5年生）の児童とも、自分の考えを書いたり発表したりすることに課題があることが分かった。これらの学習活動に児童が意欲的に取り組むためには、相手意識や目的意識をもたせて交流することが大切であると考える。今回の研究では、それぞれの研究校の児童を情報発信の対象として交流することで、言語活動の目的をより明確化するという学習上の効果をねらった。

このように、2校のプロジェクト研究校を、課題を解決するための手立てとして授業づくりに活用していった（図7）。

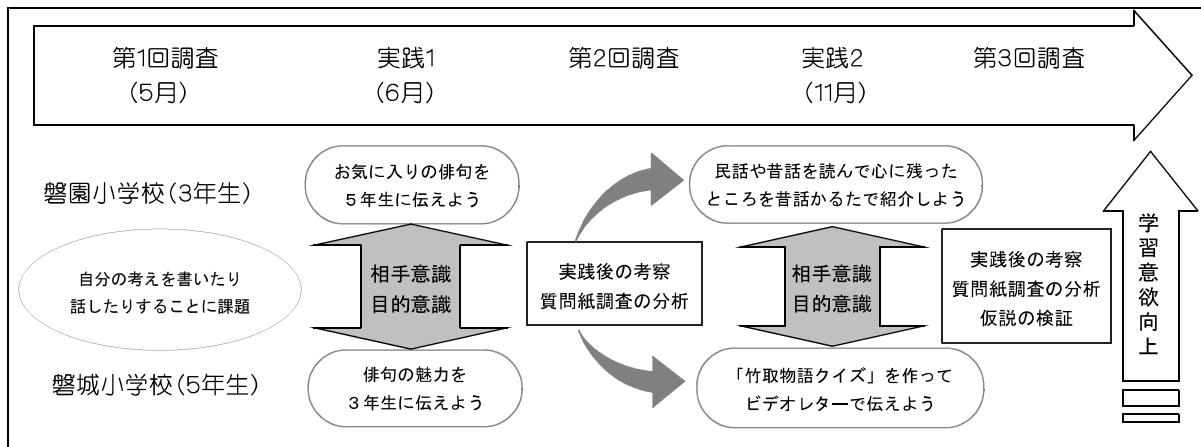


図7 プロジェクト研究の進め方

3 授業実践の具体

(1) 磐園小学校（3年生）1学期の実践

ア 実践の概要

6月に伝統的な言語文化に関する単元で実践を行った。単元名は、「お気に入りの俳句を5年生に伝えよう—音読を通して、俳句に親しむー」で、児童がいろいろな俳句に親しむ中で自分のお気に入りの俳句を選び、それをしおりに書いて磐城小学校の5年生に伝えるという学習である。

今回の実践では、学びを拓く教材開発として、教科書教材以外に3年生の発達段階に適した様々な俳句を教材化することを試みた。教科書教材の中からお気に入りの俳句を選ぶ場合、選択できる俳句の数が少ない。そこで、オリジナルの俳句集「にほんごのしらべ」（図8）を作成し、選択の幅を広げられるように工夫した（資料3参照）。また、児童の主体的な思考・判断を生かす場面として、

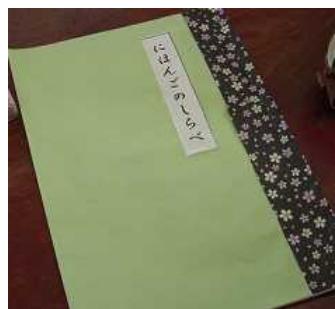


図8 にほんごのしらべ

いろいろな俳句を音読することを通して句の意味を想像する（思考）、お気に入りの俳句を選び、その理由を考える（判断）場面を単元に設定した。「俳句しおり」でお気に入りの俳句を伝えるという言語活動を通して、俳句を音読したり、俳句の特徴や描かれた季節・背景を思い浮かべたりする力が付けられると考えた。

イ 指導計画

- ・単元名 お気に入りの俳句を5年生に伝えよう 一音読を通して、俳句に親しむ一
- ・教材名 俳句を楽しもう（光村図書・3年上）
- ・単元の目標

○易しい文語調の俳句に親しみ、お気に入りの俳句を選んで伝えようとする。

(国語への関心・意欲・態度)

○俳句の特徴を知り、季節や情景を思い浮かべたり、五・七・五のリズムを感じ取りながら音読したりすることができる。

(伝統的な言語文化と特質に関する事項(1)ア(ア))

- ・単元の指導計画（全3時間）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔 〕評価方法〔 〕
一	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「俳句しおり」でお気に入りの俳句を5年生に伝えることを知る。 ・教科書の俳句を音読する。 ・教科書教材以外の俳句を集め、俳句集「にほんごのしらべ」を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が作成した「俳句しおり」のモデルや学習計画表を提示し、児童が学習の見通しをもてるように工夫する。 ・いろいろな俳句に触れさせるために、教科書教材以外の俳句も紹介する。 ・児童の実態に合わせ、意味が捉えやすい俳句を集めること。 	[関] 教科書や俳句集「にほんごのしらべ」の俳句を進んで音読し、俳句に親しもうとしている。(授業中の発言や音読の様子を基に評価する。)
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書教材で俳句の特徴を知る。 ・五・七・五のリズムを感じ取りながら、俳句を音読する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句の特徴を知るとともに、音読を通して、独特のリズムを体感できるように指導する。 ・俳句集「にほんごのしらべ」を使って、個人や学級全体で繰り返し俳句を音読するように助言する。 	[言] 俳句の特徴を知り、季節や情景を思い浮かべたり、五・七・五のリズムを感じ取りながら音読したりしている。(授業中の発言や音読の様子を基に評価する。)
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・児童一人一人がお気に入りの俳句を選び、グループ内で俳句とその理由を紹介する。 ・選んだ俳句をしおりに書いて、「俳句しおり」を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一つのグループに活動のモデルを提示させ、各グループの活動がスムーズに進むように支援する。 ・他校の5年生に伝えるという相手意識と目的意識を確認する。 	[関] お気に入りの俳句を選んでグループ内で紹介し、他校の児童にも「俳句しおり」で伝えようとしている。(グループ活動の様子やワークシートの記述内容、「俳句しおり」に書いた俳句を基に評価する。)

ウ 実践後の考察

第1時では、学習計画表（図9）を使って「他校の5年生にお気に入りの俳句をしおりに書いて伝えること」が学習のゴールであることを知らせ、教員が作った俳句しおりのモデルを見せたことで児童は学習の見通しをもつことができた。さらに、教科書に掲載されている俳句以外にも、いろいろな俳句を紹介し、オリジナルの俳句集「にほんごのしらべ」を作成した。多くの俳句に触れることで俳句に興味をもち、進んで俳句を音読する姿が見られた。ある児童は、俳句に出てくる「草履」という言葉に興味をもち、自ら進んで辞書を引き、分かったことをワークシートに書き込んでいた。記述内容より、意欲的に学んだ様子が確認できた（図10）。

第3時では、他校の5年生に俳句しおりをプレゼントするという相手意識や目的意識がはっきりしていることもあり、児童は意欲的にしおり作りに取り組んでいた。しおりも、自分が暗唱した俳句の1枚だけでなく、その他の句も書いて伝えたいという児童が多数おり、休み時間にも俳句しおり作りを行った。

しかし、俳句しおりを作ることに興味が向く余り、俳句の意味や俳句そのもののよさまで感じることができない児童もあり、伝統的な言語文化に対する深い理解には課題が残った。

エ 質問紙調査の分析

実践後に第1回調査（5月）と同じ内容の質問紙調査（6月）を行い、各質問項目の回答を点数化し、その平均値を求めた（資料4参照）。

すると、質問28項目中、5月の調査より平均値が増えた項目は10項目あり、その内0.2点以上増えた項目は、「自分がもっているのう力をじゅうぶんにはつきしたい。」（+0.25点）、「読書はすきだ。」（+0.25点）、「自分の考えを文章に書くことはとく意だ。」（+0.22点）であった。

項目11「古てん（むかしのお話など）のべん強はすきだ。」と項目14「古てん（むかしのお話など）のべん強は大切だ。」と項目17「教科書いがいの古てん（むかしのお話など）をべん強してみたいと思う。」の三つの項目（以下「古典に関する項目」という。）に着目してみると、いずれも平均値は、5月の調査よりやや低い結果であった。

質問紙調査では、「お気に入りの俳句を5年生に伝えようの学習はどうでしたか？」という内容の記述回答も試みた。今回の学習に対しては、概ね「楽しかった」「面白かった」という回答が得られ、「むかしのかん字やむかしの言葉なども出てきて、むずかしかったけど楽しかった。」や「とてもいい俳句がいろいろあっていいと思います。」といった俳句そのもののよさや古典を学ぶ楽しさに言及したもの

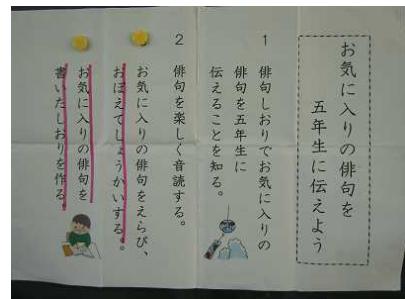


図9 学習計画表

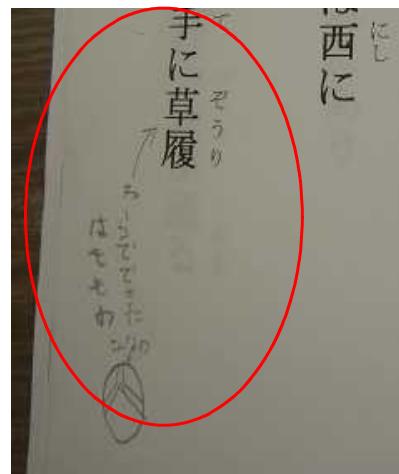


図10 ワークシートの書き込み



図11 俳句しおり作り



図12 完成した俳句しおり

が見られた。また、「いろいろな理由が出ておもしろかった。」など、一人一人の思考がしおり作りを通して可視化されたことの楽しさが書かれたものもあった。しかし、しおり作りの面白さに興味が向き、古典そのものの面白さに気付く授業であったかは疑問が残った。2学期は、教材の素材研究を進め、古典に興味がもてる授業づくりを模索する必要性を感じた（図11、12）。

（2）磐城小学校（5年生）1学期の実践

ア 実践の概要

磐園小学校と同じく6月に伝統的な言語文化に関する実践を行った。単元名は、「俳句の魅力を3年生に伝えよう—自分の考えが伝わるように音読する—」で、「日本語のしらべー夏ー」（東京書籍）という教材を使って実践した。

教科書教材を繰り返し音読することで俳句に親しみ、その中から好きな一句を選んで俳句の意味や魅力について他校の3年生に伝えるという学習である。5月に実施した質問紙調査の結果で、児童の有能感を高める取組が必要であることが明らかになったため、今回の実践では、俳句を伝える場面でグループ活動を取り入れ、児童一人一人に役割意識をもたせるように工夫した。また、タブレット端末を用いてビデオレターを作成することとし、ICT機器を積極的に活用して児童の「話すこと」に対する苦手意識を克服していきたいと考えた。他校の3年生をビデオレターで伝える対象として、相手意識や目的意識が明確になり、声の大きさや話す速さ等、適切な話し方についても児童自ら意識することができた。

イ 指導計画

- ・単元名 俳句の魅力を3年生に伝えよう—自分の考えが伝わるように音読する—
- ・教材名 日本語のしらべー夏ー（東京書籍・5年）
- ・単元の目標

○グループで協力しながら3年生に進んで俳句の魅力を伝えようとする。

(国語への関心・意欲・態度)

○文語調の俳句について内容の大体を知り、音読することができる。

(伝統的な言語文化と特質に関する事項(1)ア(ア))

- ・単元の指導計画（4時間）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔 〕評価方法〔 〕
一	1	・他校の3年生に、ビデオレターで俳句の魅力を伝えることを知る。	・学習計画表を提示して、学習の見通しがもてるよう支援する。	〔関〕俳句の魅力を伝える学習に進んで取り組もうとしている。（授業中の発言内容を基に評価する。）
	2	・「日本語のしらべー夏ー」を音読し、俳句の内容を理解する。	・暗唱できるように繰り返し音読することを指導する。	〔言〕文語調の俳句について内容の大体を知り、分かつたことをノートにまとめている。（ノートの記述内容を基に評価する。）
二	3	・ビデオレターの内容をグループで話し合い、練習する。	・俳句の魅力や感想をグループで話し合い、一人一人の役割を決めて発表できるように助言する。	〔言〕文語調の俳句を音読しようとしている。（音読の様子を基に評価する。）

4	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオレターを撮影し、発表の内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末の特徴や使い方を説明し、児童全員が操作するように伝えれる。 	<p>〔関〕タブレット端末を使って、グループで協力しながら俳句の魅力を伝えようとしている。(活動の様子や録画した映像を基に評価する。)</p>
---	---	---	---

ウ 実践後の考察

学習のはじめに、タブレット端末を使って俳句の魅力を伝えるという学習のゴールを示したことで、児童は学習に興味をもつことができた。撮影する場面では、4人一組のグループを作って学習活動を展開した。①俳句の音読（暗唱）、②俳句の意味、③俳句の魅力、④俳句の感想とグループで四つの役割を決めたことで、一人一人の責任感が増し、どの児童も協力して活動に取り組む姿が見られた（図13）。

タブレット端末を活用したこと、児童は伝える活動に興味を高めた。事後の質問紙調査で、「ビデオレターで俳句の魅力を3年生に伝えようの学習はどうしたか？」の内容で記述回答を求めた。すると、「iPadを使ってすることが楽しかった。」「緊張したけれども楽しかった。」といった感想が多数見られ、これららの記述から、伝える活動の場面でICT機器を活用したことが、楽しく学ぶことに効果があったと推察された。



図13 協力して撮影する児童

エ 質問紙調査の分析

磐園小学校の3年生と同じく、6月の実践後に第1回調査（5月）と同じ内容の質問紙調査を実施した。各質問項目の回答を点数化して平均値を求めてみると、全28項目中23項目で平均値が上昇した（資料5参照）。特に、「自分がもっている能力を十分に発きしたい。」（+0.48点）、「ひとりで解決できることは、できるだけひとりでしている。」（+0.45点）、「授業で分からぬことがあると、学級の友達に聞くことができる。」（+0.45点）の項目では、平均値が0.4点以上増えた。児童一人一人に役割をもたせたことでグループでの有用感が増し、課題解決に向けて協働的に学習できたのではないかと推察された。

さらに、質問紙調査の中で、「まったく思わない」の最も否定的な回答をした児童数に着目すると、全28項目中、21項目において5月の調査より減少したことが確認できた（資料6参照）。今回の学習活動によって、学習意欲等に関する全体的な底上げがなされたのではないかと示唆された。これは、自分の考えを発表することに課題が見られた本学級児童が、タブレット端末の記録を基にした評価で、すべての児童が評価規準を達成することができたことからも推察された。

次に、質問紙調査の古典に関する項目に着目した。すると、各質問項目の平均値が「古典の勉強は大切だ。」と「教科書以外の古典を勉強してみたい。」では上昇しているが、「古典の勉強は好きだ。」では0.03点下がっていることが分かった。タブレット端末を活用したことにより、発表する活動に興味が向かい、俳句という伝統的な言語文化を深く学ぶ時間や機会が少なかったからではないかと考えた。

以上のことから、今回の実践では、古典の学びを楽しむことまで深めることができなかつたため、2学期の授業づくりではこの点に気を付けながら取り組むこととした。

(3) プロジェクトとしての1学期のまとめ

事前の質問紙調査の結果、磐園小学校（3年生）と磐城小学校（5年生）共に、自分の考えを書いたり話したりすることに課題があることが分かった。その課題を解決する手段として、「俳句しおり」と「ビデオレター」というツールを使い、お互いの児童を対象として、相手意識・目的意識をもたせた表現活動を展開したことは、児童の学習意欲を高める上で効果的であった。また、言語活動をグループで協働的に進めたことは、児童一人一人の有用感を高め、意欲的に学習活動に取り組む姿へつなげることができた。

しかし、児童の学習の様子や質問紙調査の分析から両研究校とも表現する活動自体に児童の意識が向かい、伝統的な言語文化である俳句そのものの学びを深める学習が十分でなかった可能性が示唆された。2学期は、1学期の実践を生かしつつ、児童が古典を深く学ぶことでその楽しさが実感できるような授業づくりを目指して研究を進めていった。

(4) 磐園小学校（3年生）2学期の実践

ア 実践の概要

2学期は11月に、教科書教材「三年とうげ」を使って「民話や昔話を読んで、心に残ったところを昔話かるたで紹介しよう」という実践を行った。「三年とうげ」は、韓国の民話であり、場面の移り変わりや主人公の性格や気持ちの変化を捉えることを付けたい力として読み進めた。この付けたい力を確実に身に付けさせるために、物語の中で心に残ったところをかるたで紹介するという言語活動を位置付けた。「昔話かるた」とは、様々な世界や日本の民話・昔話を読む中で、紹介したい話を一つ選び、面白いと思うところを五・七・五の十七音に要約して字札に表現したものである。かるたの絵札には、面白いと思った場面の絵も描いていった。

「昔話かるた」を作るために、「三年とうげ」を読むことと並行して、様々な世界や日本の民話・昔話を読む活動（以下「並行読書」という。）を進めた。「三年とうげ」で一度かるたを作り、そこで学んだ力を活用して並行読書した民話・昔話の中からかるたを作成した（図14）。作成したかるたで遊んだ後、磐城小学校の5年生にも遊んでもらうように単元を構成した。



図14 昔話かるた

イ 指導計画

- ・単元名 民話や昔話を読んで、心に残ったところを昔話かるたで紹介しよう
- ・教材名 三年とうげ（光村図書・3年下）
- ・単元目標

○昔話かるたをつくるために、世界や日本の民話・昔話を幅広く読む。

(国語への関心・意欲・態度)

○民話・昔話の心に残ったところを紹介するために、場面の移り変わりや、登場人物の性格や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読むことができる。

(読むことウ)

○自分が読んで紹介したいと思う本について、選んだ理由を明らかにしながら読むことができる。

(読むことカ)

○民話・昔話を五・七・五に要約し、リズムや国語の美しい響きを感じ取りながら音読することができる。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ア(ア))

・単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・昔話かるたをつくるために、世界や日本の民話・昔話を幅広く読もうとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・民話・昔話の心に残ったところを紹介するために、場面の移り変わりや、登場人物の性格や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読んでいる。 (読むことウ) ・自分が読んで紹介したいと思う本について、選んだ理由を明らかにしながら読んでいる。 <p style="text-align: right;">(読むことカ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・民話・昔話を五・七・五に要約し、リズムや国語の美しい響きを感じ取りながら音読している。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ア(ア))

・単元計画 (全12時間)

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔 〕評価方法()
一	1	<ul style="list-style-type: none"> ・昔話かるたを作ることを知らせ、学習の見通しをもつ。 ・様々な世界や日本の民話・昔話の本を紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昔話かるたの教師モデルを提示し、言語活動のイメージを共有する。 ・地域の図書館と連携して、民話・昔話の本を複数そろえ、読書環境を整える。 	[関] 昔話かるた作りに興味をもち、進んで民話・昔話を読もうとしている。(授業中の発言や読書の様子を基に評価する。)
二	2 3 4 5 6 7	<ul style="list-style-type: none"> ・三年とうげを読んで、話の内容を理解する。 ・音読を通して、場面の移り変わりや登場人物の気持ちの変化を考える。 ・三年とうげで心に残ったところと理由を書く。 ・三年とうげの話を五・七・五に要約し、かるたを作る。 ・字札に合う絵札をかく。 	<p style="text-align: center;">並行読み書き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語辞典を積極的に使って言葉の意味等を調べるよう助言する。 ・登場人物の気持ちを叙述を基に考えて音読している児童を褒め、意見を交流する。 ・「言葉の宝箱」を使って、抜き出すときの観点を明確にするように指導する。 <p style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">わたししが一番（ ）と思ったところは（ ）です。 理由は（ ）だからです。</p>	[読ウ] 民話・昔話の心に残ったところを紹介するために、場面の移り変わりや、登場人物の性格や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読んでいる。(音読の様子や発言、ノートの記述を基に評価する。)
三	8 9	<ul style="list-style-type: none"> ・昔話を読んで、昔話データブックを作る。 ・自分が読んだ昔話のあらすじと、自分が一番どう思ったか、その理由を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・心に残ったところを表すことができる言葉を本文から探し、大事な言葉に線を引かせるように助言する。 ・本の読み聞かせをしながら、いろいろな本を手に取れるように支援する。 ・あらすじや心に残ったところの理由がまとめやすいようなワークシートを作る。 	[読カ] 三年とうげで紹介したいと思うところを見つけ、選んだ理由を明らかにしながら読んでいる。(ワークシートやかるたの記述を基に評価する。)

	10 11	・昔話データブックを基に心に残った話で昔話かるたを作る。	並行 読書	・個人で昔話かるたの字札を考えた後、ペアで選んだ言葉を再考する。 ・紹介したい本や内容が分かるような言葉を抜き出すように助言する。	[言] 民話・昔話を五・七・五に要約し、リズムや国語の美しい響きを感じ取りながら音読している。(音読する様子を基に評価する。)
四	12	・クラスの友達と昔話かるたで遊ぶ。		・かるた遊びを通して、興味をもった民話・昔話を読むよう助言する。	[関] 昔話かるたを作ったり遊ぶことを通して、世界や日本の民話・昔話に興味をもち、幅広く読もうとしている。(活動の様子やデータブックの記録を基に評価する。)

ウ 実践の様子（第10時）

(7) 目標 自分が読んで紹介したいと思う本について、選んだ理由を明らかにしながら読み、昔話かるたを作ることができる。

(1) 本時の学習

時間	学習活動	指導上の留意点 評価規準 [] 評価方法 () ○準備物
0	1 本時の学習のめあてや内容を確認する。	・学習計画表を基に確認させる。 ○学習計画表
	昔話データブックから、心に残った民話や昔話をかるたにしよう	
10	2 昔話かるたを作る手順を確かめる。 3 昔話を読み、心に残ったところを表す大事な言葉を探す。 4 昔話から大事な言葉を抜き出し、ワークシートに書く。 5 抜き出した言葉を基に、五・七・五の十七音にまとめる。	・例を示しながら、話の特徴がつかめるような言葉を抜き出すように指導する。 ○掲示用の字札と絵札 ○民話・昔話の本
25	6 ペアで話し合い、字札の文を再考する。	・ワークシートを訂正する場合は、思考の過程が分かるように赤鉛筆で書き込むことを助言する。 ・話し合う際には、①十七音のリズムを意識して書けているか、②十七音で昔話の内容が想像できるかの2点に着目することを指導する。
35	7 字札の文をカードに清書する。 8 字札に合う絵札をかく。	・抜き出した言葉を基に字札の文を考えるように助言する。 ○カード（字札・絵札） 〔読力〕自分が読んで紹介したいと思う本について選んだ理由を明らかにしながら読んでいる。
40	9 次時は、クラスの友達と作ったかるたで遊ぶことを伝える。	(ワークシートやかるたの記述を基に評価する。)

エ 実践後の考察

(7) 学びを拓く教材開発

1学期の俳句の学びを生かして、民話・昔話を五・七・五の十七音にまとめ、かるたで紹介するという言語活動を位置付けた。学びを拓く教材開発として、かるた作りを通して様々な民話や昔話に親しませ、古典の楽しさを感じさせることをポイントとした。

昔話かるたを作るには、教科書教材の学びと並行してたくさんの民話や昔話を読む必要がある。教室の読書環境を整えるために、地域の図書館と連携して児童一人あたり6冊読めるように十分な冊数の本を用意した(図15)。児童は、民話や昔話を比べたり関係付けたりして読みながら話の共通点や相違点を見付けることができ、古典の面白さに気付いていった。「昔話データブック」(資料7参照)を作成し、読後に心に残ったところとその理由を書き込ませ、児童の読書状況を把握できるように工夫した。データブックのメダル集めをきっかけに読書に興味をもち、民話や昔話の本を17冊読んで要約した児童もいた。

また児童は、かるたで遊ぶ際に、絵札を取ることよりも友達がどんな本を読み、どんな字札を作ったのかを気にしている様子であった。字札を読み上げている途中では絵札を取らずに、最後まで読み終えるまで聞きたがったり、「せっかく(字札を)書いたのに、最後まで聞きたい。」という声も聞かれたりした(図16)。児童は、昔話かるたで遊ぶことを通して他の民話・昔話にも興味をもち、自ら進んで本に手を伸ばすようになった。

(イ) 児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫

児童の主体的な思考・判断が生かされるように、まず読んだ本の中からかるたにしたい話を自ら選ばせた。児童が話を選ぶ際には、書きためた「昔話データブック」の記述を手がかりにするよう助言した。データブックには、自分が一番心に残ったところとその理由を書かせたが、「すごい」という一言で表現してしまう児童もいたため、「言葉の宝箱」(資料8参照)というプリントで感情を表す言葉をたくさん例示し、児童の感情を丁寧に表現できるようにした。語彙を豊かにすることで、児童の思考が整理され、より主体的に学ぶ姿につながった。

また、字札の言葉を考えさせる際に、教員が字札のモデルを示した(図17)。かるた作りでは、



図17 教員によるモデルの提示

話の内容をより正確に伝えるという観点で言葉を抜き出すことが大切であり、教員によるモデル提示でその観点が明確になったと考えられる。3年生の児童にとって、話を十七音で表現することは深い思考を必要とする。個人での字札づくりの場面でも、教員によるモデルが十七音の言葉選びの判断基準となつたと考える。

次に、個人で作った字札の言葉を、隣の席の児童とペアになり再考する活動を行った。ペア



図15 読書環境の整備



図16 昔話かるたで夢中に
なって遊ぶ児童

で話し合うことで更に思考が深まり、表現が変わる児童もいた。課題の解決に向けて協働的に取り組むことで、より主体的に学習に向かう様子が確認でき、どの児童も付けたい力を身に付けることができていた(図18)。



図18 思考が深まる学習形態の工夫

(5) 磐城小学校（5年生）2学期の実践

ア 実践の概要

磐園小学校と同じく、2学期は11月に実践を行った。使用した教材は、「竹取物語」で、「竹取物語クイズを作って、ビデオレターで伝えよう」という単元を計画した。「竹取物語」は小学校で初めて出会う古文である。親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り音読することを付けたい力とした。そこで、「竹取物語」の中で分からぬところや不思議に思うところを基に「竹取物語クイズ」を作成して、ビデオレターで伝えるという言語活動を位置付けた。「竹取物語クイズ」とは、竹取物語の原文の中から分からぬところや不思議に思うところを基に作成したクイズである。クイズはグループで話し合って決定し、①竹取物語の原文の暗唱、②クイズ、③答えの選択肢とクイズのヒント、④クイズの答えの四つ内容で役割分担を行った。クイズの出題は、1学期の学びを生かしてグループで協力しながらタブレット端末で撮影した。

イ 指導計画

- ・単元名 「竹取物語クイズ」を作って、ビデオレターで伝えよう
- ・教材名 竹取物語（東京書籍・5年）
- ・単元の目標

○竹取物語を進んで音読し、分からぬところや不思議に思ったところをクイズにして、ビデオレターで伝える。

(国語への関心・意欲・態度)

○親しみやすい古文について内容の大体を知り、音読することができる。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ア(ア))

- ・単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	言語についての知識・理解・技能
・竹取物語を進んで音読し、分からぬところや不思議に思ったところをクイズにして、ビデオレターで伝えようとしている。	・親しみやすい古文について内容の大体を知り、音読している。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ア(ア))

・単元の指導計画（全5時間）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔 〕・評価方法（ ）
一	1	・竹取物語を読んで分からぬところや不思議に思ったところをクイズにして伝えるという学習の見通しをもつ。	・学習計画表を基に、学習の目標や内容、言語活動について確認する。	〔関〕分からぬところや不思議に思ったところを見つけながら、竹取物語を音読している。（授業中の発言やワークシートの記述を基に評価する。）
二	2	・竹取物語を音読したり視写したりすることを通して、内容の大体を理解する。	・国語辞典や古語辞典等の図書資料を用意し、分からぬ言葉や文を主体的に調べることができるように支援する。	〔言〕竹取物語について内容の大体を理解している。（発言内容やワークシートの記述内容を基に評価する。）
	3	・分からぬところや不思議に思ったところを中心に、クイズを作る。	・児童の思考を見取ることができるように、分かった内容をワークシートに色分けして記述するよう助言する。	
	4	・グループでクイズの中身について話し合う。 ・グループで役割分担をして、繰り返し練習して竹取物語を暗唱する。	・練習回数を記録して、進んで暗唱できるようにワークシートを工夫する。	〔言〕竹取物語を繰り返し音読している。（音読の様子を基に評価する。）
三	5	・グループに分かれて、作ったクイズをビデオレターで伝える。 ・単元の振り返りをする。	・自教室と特別支援学級に分かれて撮影を行う。	〔関〕タブレット端末を使って、グループで協力しながらクイズをビデオレターで伝えようとしている。（タブレット端末の撮影記録とワークシートの自己評価を基に評価する。）

ウ 実践の様子（第5時）

(7) 目標 タブレット端末を使って、グループで協力して竹取物語のクイズをビデオレターで伝える。

(イ) 本時の学習

時間	学習活動	指導上の留意点
		評価規準〔 〕評価方法（ ）○準備物
0	1 本時の学習のめあてや内容を確認する。	・学習計画表を基に確認させる。 ○学習計画表 「竹取物語クイズ」をビデオレターで伝えよう

	5	2 発表のポイントを確認した後、グループに分かれて練習をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ポイントを押さえる。 ①全員が話す ②姿勢、話す速さや声の大きさ ・机間指導をして、練習がスムーズに進むように助言する。 ○ワークシート
	20	3 自教室と特別支援教室に分かれてビデオレターを撮影する。	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級の教員と学級担任がビデオレターの撮影方法について共通理解しておく。 ○タブレット端末（6台）
	40	4 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りの観点を確認させてから、ワークシートに記入させるようとする。 ・この後、撮影したビデオレターを磐園小学校の3年生に送ることを伝える。 〔関〕タブレット端末を使って、グループで協力して竹取物語のクイズをビデオレターで伝えようとしている。（タブレット端末の撮影記録とワークシートの自己評価を基に評価する。）

エ 実践後の考察

(7) 学びを拓く教材開発

竹取物語（原文）を繰り返し音読して（図19）分からぬところを抜き出しながら、クイズの素材とした。分からぬ言葉は辞書で調べたり現代語訳と比較したりしながら思考し、明らかになったことをワークシートに書き足していく。小学校で初めて出会う古文ということで戸惑いもあったが、音読中心の学習活動だけではなく、言葉の一つ一つの意味を確認



図19 繰り返し音読する児童

して分からぬところを主体的に調べることで、深い学びを実現することができたと考える（図20）。

また、他校の3年生に「竹取物語クイズ」（図21）を作つて伝えるという相手意識・目的意識を明確にして取り組み、児童一人一人が役割をもつたことで意欲的に学習できていた。

古文を声に出して読んでみよう		意味
名前	名前	
よりい見るに 名をば それを見れば	竹体の中には その竹の中に 一筋ありまし た。ややし かがりて 見ゆるに、 つづかん 中光りたり。 それを見れば 三十ばかりなる人 大変わく様 つくしう てあたり。	根元の光 てりあつ てて ややし かがりて 見ゆるに、 つづかん 中光りたり。 それを見れば 三十ばかりなる人 大変わく様 つくしう てあたり。
よりい見るに 名をば それを見れば	本 根本 商売 分け入る	本あり 本あり 本あり 本あり
近づいて見るこ と 名前	不思議に思つて 手のひらほどの小さ い人が 変かわいい様 ですわざと	不思議に思つて 手のひらほどの小さ い人が 変かわいい様 ですわざと
近づいて見るこ と 名前	1本 根本 商売 分け入る	1本 根本 商売 分け入る

間違いに気付き書き直している記述

図20 児童の思考が分かるワークシート

Q 1	三寸ばかりとはどういう意味でしょう？（ヒント 人の大きさです。）
	☆①手のひらほど小さいという意味 ②親指ほど小さいという意味
Q 2	いとうつくしうついたりとありますが、その意味は何でしょう？（ヒント 絵本を思い出してください。）
	☆①たいへんかわいらしい ②少しかわいらしい
Q 3	さっき読んだ古文の中に、もとひかりたる竹なんとあります、どういう意味でしょうか？
	（ヒント もともと光っている竹と根元が光っている竹、どちらが怪しいと考えられますか。）
	☆①根元が光っている竹 ②もともと光っている竹
Q 4	よろづのこと使いけりとありましたが、よろづのこととは何でしょうか？（ヒント たくさんに使うことです。）
	☆①いろいろなこと ②自分のことだけ ③竹かご
Q 5	あやしがりてとありますが、あやしがりてとはどういう意味でしょうか？（ヒント あやしくは思っていません。）
	①疑っている ☆②不思議に思っている
Q 6	ひとすじありけりとは、どういう意味でしょうか？
	☆①1本ありました ②1才になりました

☆=正解の答え

図21 児童が作った「竹取物語クイズ」

(1) 児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫

児童の主体的な思考・判断が生かされるように、六つのグループに分かれ、タブレット端末を使ってお互いの発表の様子を撮影し合った。磐園小学校の3年生に分かりやすく伝えるために、どのように発表すればよいかを考え、姿勢、話す速さ、声の大きさ、表情等を確認しながら、お互い改善点を見つけて発表に生かす姿が見られた。1学期にタブレット端末を使っていることもあり、緊張せずにスムーズに発表することができた。また、相手意識がはっきりしているので、児童が主体的に竹取物語の本文を暗唱して古典に親しんでいた。

実践後に行った質問紙調査の記述回答において、「ビデオレターはとっても楽しくて、これからはもっと他の古典などを知りたいです。」「竹取物語を勉強して、昔の言葉をくわしく知ることができてよかったです。」等、前向きに学習に取り組もうとする内容が確認できた。

4 成果と課題

(1) 質問紙調査の分析

両研究校において、11月の実践後に3回目の質問紙調査を行った。5月に実施した質問紙調査と同様、各質問項目の回答を点数化してその平均値を求めた。

磐園小学校（3年生）では、28の質問項目の内15項目で平均値が上昇した（表3）。5月の事前調査では平均値が低かった「3音読することはすきだ。」の項目は0.38点、「6自分の考えを文章に書くことはとく意だ。」の項目は0.31点、「18国語のじゅぎょうでは、自分の考えを発表するき会があたえられていると思う。」の項目は0.25点平均値が上昇した。

次に、国語や古典に関する項目に着目すると、「2国語のべん強はすきだ。」と「5国語のべん強は大切だ。」の二つの項目は平均値が上がっているが、「11古てんのべん強はすきだ。」、「14古てんのべん強は大切だ。」、「17教科書いがいの古てんをべん強してみたいと思う。」の項目に関しては、平均値が下がっていることが分かった。

今回の実践では、自ら選んだ民話や昔話を十七音に要約するという学習課題を設定したが、3年生の児童にとっては難しい課題であったことが推察される。平均値の上昇から、自分の考えを表現することへの自信には取組の成果が見られたが、児童が深く思考し判断する言語活動を学習意欲の向上につなげるためには、適切な難易度の課題を設定する必要があることが分かった。

次に、5月の実施した質問紙調査の結果で「どちらかといえば、そう思わない」「まったく思

わない」といった回答（以下「否定的な回答」という。）が特に多かった項目に着目した。同項目の5月と11月の調査結果の回答数を表に整理したものが図22である。5月の調査では「まったく思わない（回答1）」の回答数が、「3 音読することはすきだ。」が10、「6 自分の考えを文章に書くことはとく意だ。」が11と両項目とも2桁であったのにに対して、11月調査では、項目3では2、項目6では4に減少していることが分かった。また、「18 国語のじゅぎょうでは、自分の考えを発表するき会があたえられていると思う。」や「21 国語のじゅぎょうでは、学級の友だちとの間で話し合

表3 平均値の比較（磐園小学校3年生）

質問項目	第1回調査		差
	5月	11月	
1 よく分からないことは、分かるまで調べたい。	3.38	3.28	-0.09
2 国語のべん強はすきだ。	2.81	3.16	0.34
3 音読することはすきだ。	2.38	2.75	0.38
4 おもしろそうなことは何でもべん強してみたい。	3.44	3.66	0.22
5 国語のべん強は大切だ。	3.22	3.31	0.09
6 自分の考えを文章に書くことはとく意だ。	2.50	2.81	0.31
7 国語のじゅぎょうの内ようはよく分かる。	3.06	3.22	0.16
8 自分がもっているのう力をじゅうぶんにはつきしたい。	2.94	3.25	0.31
9 国語のじゅぎょうのはじめに、めあてがしめされていると思う。	3.22	3.31	0.09
10 自分からべん強に取り組んでいる。	2.88	3.03	0.16
11 古てん（むかしのお話など）のべん強はすきだ。	3.41	3.31	-0.09
12 国語のじゅぎょうのさい後に、学習内ようをふり返る活動をよく行っていると思う。	2.81	2.69	-0.13
13 むずかしいもんだいに出あうよりやる気が出る。	3.00	2.81	-0.19
14 古てん（むかしのお話など）のべん強は大切だ。	3.63	3.41	-0.22
15 自分の学級いがいの人とべん強することは楽しいと思う。	3.25	3.34	0.09
16 ひとりでかい決できることは、できるだけひとりでしている。	2.94	3.06	0.13
17 教科書いがいの古てん（むかしのお話など）をべん強してみたいと思う。	3.38	3.19	-0.19
18 国語のじゅぎょうでは、自分の考えを発表するき会があたえられていると思う。	2.81	3.06	0.25
19 べん強面では友だちからたよられていると思う。	2.63	2.09	-0.53
20 友だちの前で自分の考え方や意見を発表することはとく意だ。	2.63	2.56	-0.06
21 国語のじゅぎょうでは、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思う。	3.06	3.13	0.06
22 学校では落ち込いてじゅぎょうを受けている。	3.38	2.97	-0.41
23 ジュギョウで分からなことがあると、学級の友だちにきくことができる。	3.28	3.22	-0.06
24 読書はすきだ。	3.34	3.56	0.22
25 友だちと話し合うとき、友だちの話や意見をさい後まで聞くことができる。	3.41	3.00	-0.41
26 国語のじゅぎょうで自分の考え方を書くとき、考え方の理由が分かるように気をつけて書いている。	2.97	3.25	0.28
27 自分のすることや言うことに自しんをもっている。	3.06	2.75	-0.31
28 学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考え方を深めたり広げたりすることができている。	2.91	2.81	-0.09



図22 否定的な回答の数の変化

う活動をよく行っていると思う。」、「26国語のじゅぎょうで自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。」といった児童の主体的な思考、判断を生かす学びについても、否定的な回答の数が、項目18は12から8、項目21は10から7、項目26は11から5へ減少していた。さらに、「2国語のべん強はすきだ。」に表れる国語への興味・関心に関する項目や「8自分がもっているのう力をじゅうぶんはつきしたい。」という有能さへの欲求に関する項目も、それぞれ10から7、13から4へ否定的な回答の数が減少したことが分かった。

今回の実践では、一人一人がかるたにしたい話を自ら選び、隣の児童とペアになって字札の文を推敲したり、ワークシートに大事な言葉を抜き出したりすることで、すべての児童が自分のかかるたを完成することができた。「音読」や「自分の考えを書く」といった基本的な個人の学びの上に、児童の主体的な思考、判断が生かされる言語活動を工夫したことにより、11月調査の方が、否定的な回答の数が減少した。以上のことから、磐園小学校（3年生）では、国語の学びに対する興味・関心や学習意欲に関して、全体的な底上げができたのではないかと考えられる。

次に、磐城小学校（5年生）の質問紙調査を確認すると、28項目中26項目で11月の結果の方が平均値の上昇が見られた（表4）。

また、5月の第1回調査で平均値が低かった項目に着目すると、五つすべての項目において1月の平均値が上昇したことが分かった（図23）。特に「23授業で分からぬことがあると、学級の友達に聞くことができる。」の項目は0.71点、「16ひとりで解決できることは、できるだけひとりでしている。」は0.58点、「6自分の考えを文章に書くことは得意だ。」は0.45点と増えた数値が大きかった。

次に、国語や古典に関する項目（2、5、11、14）に着目すると、「国語の勉強は大切だ。」の項目以外は、平均値が上がっていることが分かった。

今回の実践では、「竹取物語」を音読中心の学習だけでなく原文の言葉の意味を調べ、内容を掘り下げた学習にも取り組んだ。「竹取物語クイズ」を作るという言語活動は、教材の素材研究を進め、古典そのものの面白さに気付かせるねらいがあった。

表4 平均値の比較（磐城小学校5年生）

質問項目	第1回調査	第3回調査	差
	5月	11月	
1 よく分からぬことは、分かるまで調べたい。	2.87	3.23	0.35
2 国語の勉強は好きだ。	2.87	2.94	0.06
3 音読することは好きだ。	2.52	2.61	0.10
4 おもしろなことは何でも勉強してみたい。	3.48	3.65	0.16
5 国語の勉強は大切だ。	3.58	3.58	0.00
6 自分の考えを文章に書くことは得意だ。	2.55	3.00	0.45
7 国語の授業の内容はよく分かる。	3.06	3.48	0.42
8 自分がもっている能力を十分に発揮したい。	2.87	3.19	0.32
9 国語の授業のはじめに、めあてが示されていると思う。	3.00	3.42	0.42
10 自分から勉強に取り組んでいる。	2.58	2.71	0.13
11 古典（むかしのお話など）の勉強は好きだ。	3.19	3.42	0.23
12 国語の授業の最後に、学習内容をふり返る活動をよく行っていると思う。	2.68	2.81	0.13
13 むずかしい問題に合うとやる気が出る。	2.55	2.81	0.26
14 古典（むかしのお話など）の勉強は大切だ。	3.32	3.65	0.32
15 自分の学級以外の人と勉強することは楽しいと思う。	3.26	3.32	0.06
16 ひとりで解決できることは、できるだけひとりでしている。	2.81	3.39	0.58
17 教科書以外の古典（むかしのお話など）を勉強してみたいと思う。	3.13	3.29	0.16
18 国語の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う。	2.74	3.13	0.39
19 勉強面では友達からよられていると思う。	2.32	2.42	0.10
20 友達の前で自分の考え方や意見を発表することは得意だ。	2.42	2.61	0.19
21 国語の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思う。	2.94	3.00	0.06
22 学校では落ち着いて授業を受けている。	3.03	3.39	0.35
23 授業で分からぬことがあると、学級の友達に聞くことができる。	2.81	3.52	0.71
24 読書は好きだ。	3.19	3.32	0.13
25 友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる。	3.23	3.26	0.03
26 国語の授業で自分の考え方を書くとき、考え方の理由が分かるよう気につけて書いている。	2.77	3.13	0.35
27 自分のすることや言うことに自信をもっている。	2.61	2.84	0.23
28 学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考え方を深めたり広げたりすることができている。	3.00	2.94	-0.06

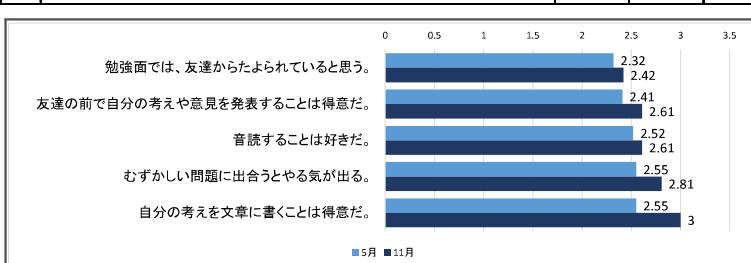


図23 平均値が低かった項目の比較（磐城小学校5年生）

このような取組の結果、児童の国語への興味・関心が広がり、学習意欲を高める一助になったのではないかと推察した。

(2) 児童の変容

今回の実践を通して、学習の様子や質問紙調査の結果に変化が見られた児童について述べる。

ア 大和高田市立磐園小学校（3年生）

(7) 児童Aの変化

児童Aは、5月の事前の質問紙調査では否定的な回答が多く、28項目の平均値は2.29であった。今回の実践では、文章を要約したり理由を書いたりして、児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動に取り組んだが、児童Aは、書くことに関して、1学期よりも自分の考えを書いて表現することが得意になってきたようだ。11月の質問紙調査と比較すると、「4おもしろそうなことは何でもべん強してみたい。」の項目の回答が1から3へ、「6自分の考えを文章に書くことはとく意だ。」の項目は1から3へ、「26国語のじゅぎょうで自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。」の項目が1から4へ変わった。全項目の平均値も3.04に上がり、国語の学習に前向きに取り組む姿が見られるようになった。

(4) 児童Bの変化

児童Bは、書いたり読んだりすることに苦手意識をもっており、国語の学習全般に対して自信がもてなかつた。しかし、2学期の学習では民話や昔話をとても気に入り、家庭でも意欲的に音読する様子が保護者から伝えられた。11月に実施した実践後の質問紙調査では、「11古てんのべん強はすきだ。」の項目の回答が1から4に、「14古てんのべん強は大切だ。」「17教科書いがいの古てんをべん強してみたいと思う。」の回答が1から3に変化し、古典の学習に興味をもって取り組めたことが示唆された。さらに、「8自分がもっているのう力をじゅうぶんはつきしたい。」「13むずかしいもんだいに出あうとやる気が出る。」といった項目でも1から3へ回答が変化し、古典の学習を通した児童の学習意欲の高まりが示唆された。

イ 葛城市立磐城小学校（5年生）

(7) 児童Cの変化

児童Cは、学年当初、落ち着いて学習に参加することができず、読書量もとても少なかつた。11月の「竹取物語クイズ」の学習では、友達と協力して取り組み、一生懸命原文を暗唱する姿が見られた。授業で活躍できる場も増え、やればできるという意識が本人の中에서도できて自信につながったようだ。質問紙調査の古典に関する項目に着目すると、二つの項目の合計が5月は2点であったが11月では7点に増え、今回の実践で古典の学習に対する興味が高まったことが確認できた。28項目の平均値を5月と11月で比較すると1.57から3.14となり、値が大きく上昇した。

(4) 児童Dの変化

児童Dは、普段の単元テストの点数はよいが、国語の学習に意欲的に取り組もうとする意識が低かった。5月に実施した質問紙調査の記述回答でも、「やってみたい国語の学習は何ですか？」の問い合わせに対して、「ない」と回答していた。質問項目の「2国語の勉強は好きだ。」「3音読することは好きだ。」に対しても、「どちらかというと、そう思わない」と回答していた。しかし、1学期の俳句の学習の後、百人一首に興味をもち、進んで覚えようとする姿が見られた。また、11月の実践では、竹取物語を大きな声で暗唱し、熱心にクイズ作りに取り組んでいた。11月の実践後の質問紙調査では、「国語の勉強は好きだ。」「音読することは好きだ。」の項目が2から3へ回答が変化し、また、同質問紙の記述回答では、「竹取物語はいい勉強になった。磐園小学校

の子にも楽しいやおもしろいと思ってほしい。」と学びの広がりが感じられる内容であった。古典の学びを通して、学習に対する興味が高まった様子がうかがえた。

(3) まとめ

今回のプロジェクト研究では、児童の国語に対する興味・関心や学習意欲を高める方法として、学びを拓く教材開発と児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫という二つを研究の柱と位置付け、2校の小学校で協力して実践を行った。

伝統的な言語文化に関する教材として、俳句や昔話、古文（竹取物語）を扱った。俳句を教材とした学習では、教科書教材以外にも児童の発達段階に適した新しい俳句を提示することを通して、児童の主体的な思考を促すことができた。また、民話や昔話を教材とした学習では、地域の図書館と連携して様々な民話や昔話の本に触れさせたことで、児童と古典の世界をつなげることでき、これから国語の学びが目指す「自ら本に手を伸ばす児童」の様子も確認できた。「竹取物語」を教材とした学習では、原文の一つ一つの言葉に着目し、古語辞典等を活用しながら疑問と向き合い、主体的に課題解決しようとする姿が見られた。児童が伝統的な言語文化を深く学んでいくことで、古典を学ぶ楽しさを感じることができた学習となつた。また同時に、小学校における伝統的な言語文化に関する授業の在り方についても、一つの方策を示せたのではないかと考えられる。

児童の主体的な思考・判断が生かされる言語活動の工夫としては、学びの「縦のつながり」や「横のつながり」を意識した実践を重ねた。「縦のつながり」である学びの系統を意識したことは、児童に付けたい力が明確になるとともに、児童の主体的な思考・判断を生かす場を適切に設定するために有効であった。また、「横のつながり」として、相手意識や目的意識を明確にして交流することで、児童にとってより魅力的な言語活動を展開することができた。このように、学びの「縦のつながり」と「横のつながり」を意識することで言語活動が活性化され、児童の学習意欲の向上に結び付いたと推察される。

今回の研究において、協働的な学びの場の設定や児童による課題づくり、相手意識や目的意識を明確にした活動、思考の道筋が分かるワークシート等の具体的な方策を実践した。これらの方策を進めるにあたっては、付けたい資質・能力を明確にし、それらを身に付けさせるために適切な言語活動を児童の実態に合わせて選択し、組み合わせることが重要である。これは、次期学習指導要領改訂が目指す学習・指導方法である「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善とつながっている。課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びが、付けたい力の習得に効果的に結び付くとき、児童の更なる学習意欲の向上が期待できる。

今後も研究の成果を基に、国語科の学びにおける課題の解決を目指して研鑽を積んでいきたいと考える。

参考文献

- (1) 文部科学省(平成20年)『小学校学習指導要領』
- (2) 文部科学省(平成20年)『小学校学習指導要領解説 総則編』
- (3) 文部科学省(平成20年)『小学校学習指導要領解説 国語編』
- (4) 文部科学省(平成23年)『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～【小学校版】』教育出版
- (5) 国立教育政策研究所(平成27年)「小学校学習指導要領実施状況調査 教科別分析と改善点

(国語)」

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/index.htm

- (6) 花田修一、小森茂、水戸部修治、松木正子編(2014)「実践国語研究327号」明治図書
- (7) 全国国語授業研究会編(2011)『子どもと創る「国語の授業』No.33』東洋館出版社
- (8) 栃木県総合教育センター『学ぶ意欲をはぐくむー「学習に関するアンケート」を活用してー』
https://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/manabuiyoku_h22/pdf/manabuiyoku_h22_all_kai.pdf
- (9) 櫻井茂男(2009)『自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア発達の視点を加えて』有斐閣
- (10) 吉永幸司、日下知美(2011)『京女式対話で学び合う小学校古典』明治図書
- (11) 田中洋一(2012)『小学校「古典の扉をひらく」授業アイデア24』明治図書
- (12) 田中洋一(2011)『国語指導必携 小学校古典指導の基礎・基本』株式会社図書文化社
- (13) 国立教育政策研究所(平成23年)『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』

【小学校 国語】教育出版

- (14) 文部科学省(平成27年)「教育課程企画特別部会 論点整理」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf